

# 嘘つき

村一番のやんちゃ者ルイは、小さい頃から嘘ばかりついていました。

「僕のお兄ちゃんは、かっこよくて喧嘩が強くて、この前も喧嘩を売ってきたやつら50人をいっぺんにやっつけたんだぞ」

「お父さんはおっきな会社の社長さんなんだ！」

初めはこのように、他人に迷惑のかからない嘘ばかりでしたが、大きくなるにつれて彼は嘘で周りの人を傷つけてしまいます。

「あいつ、影でお前の悪口言ってたぞ」

何千字、何万字という言葉を用いて嘘をつき続けて来た彼は、とうとう自分自身で何が本当で何が嘘なのかがわからなくなっていました。

「へっ、今日のあいつの顔も滑稽だったな。嘘だとも知らずまんまと騙されてよ！さあーて明日はどんな嘘をついてやろうか」

当然のごとく、彼には友達がいません。毎日毎日、人を馬鹿にするルイを誰もが嫌っていたのです。唯一の友達といえば、彼が5歳の頃からの親友、ジェシーです。

でも彼女は幼い頃から病弱で、生まれてから一度も病院を出たことはありません。

病室の真っ白い壁にぽっかりと空いた小さな窓から見える景色だけが彼女の知る「外の世界」だったのです。

「よ！調子はどうだ！」

「うん、悪くないわ。新しい薬が体に合ってるみたい！」

ルイが小さい頃たまに風邪や怪我をして病院に行くたびにいつも自分と同じ年くらいの女の子と会うので、興味を持って声をかけたのが二人の出会いです。

「ねえ、今日はどんな1日だったの？」

ジェシーは毎日のように遊びにきてくれるルイが聞かせてくれるお話が大好きです。

お話といっても、友達のいないルイには得意な嘘しかありません。外の世界を知らないジェシーに、ルイは嘘で作ったお話を毎日のように聞かせてあげました。

「早く元気になって、俺のにいちゃんみたいになれよ！俺のにいちゃんなんか、元気で力が強くて、この前も喧嘩で勝ったんだからな！」

これが、ルイが5歳の時についた一番最初の嘘でした。

「私は女の子よ？元気になっても、喧嘩なんかしないわよ。それに、私が元気になったらルイのお兄さんにも負けないくらい強くなってやるんだから！」

幼い頃から病弱で、弱気だったジェシーを前向きにさせたのが、ルイの嘘だったのです。

不器用なルイには嘘をつくしか彼女を元気にする方法がわかりません。だから何度も、何度も、何度も、ルイは病院に通い続け、ジェシーを励ますために毎日嘘をついていたのです。

しかしいつからかルイは、毎日ジェシーの前で嘘をついていたため、病院の外でも嘘しか言えないようになってしまったのです。

嘘に溢れた生活の中で、村の人間に見放されようとも、ジェシーだけがルイの心の拠り所でした。

病院に通い続けてもう5年が経ちます

その日もルイは前の日に考えた嘘をたっくさんこしらえてジェシーの待つ病院に向かいます。ですが、病室には一輪の花があるだけで、部屋はもぬけの殻になっていました。

「ジェシーは？」

廊下を通り過ぎようとした先生を呼び止めて聞きます。

「君か...

ジェシーはね、

昨日の夜容態が急変してね...

そのまま、天国に旅立っちゃったんだよ」

「えっ...」

ルイは少しの間、あまりに急な出来事に言葉を失ってしまいます。

「なんで！なんでだよ！昨日まであんなに元気に...

俺は毎日会いに来てたんだ！だから何かおかしかったらすぐ気付けたんだ！！

薬も、薬だって効いてるって！

おい！嘘つくなよ！！ヤブ医者！！本当は生きてるんだろ！

ジェシーはどこにいるんだよ！！」

悲しさと悔しさと、真実を受け入れられない気持ちがルイの中で爆発し、彼は膝から崩れ落ちました。

しばらくして落ち着いたルイは、先生からジェシーがどんな病気だったのかを初めて伝えられます。「ジェシーの病気はね、心の病気だったんだ。とても珍しい病気で、僕たち医者にもまだ治し方がわからないんだ」

「心の病気...？」目に残る涙を拭きながら、先生に尋ねました。

「うん。

彼女はね、嘘をつくと心に棘ができちゃうんだ。嘘をつくたびに1本、また1本、棘が彼女の心を突き刺し、貫いていく」

ルイは首を傾げました

なぜなら今まで嘘をついていたのは彼だったのですから。毎日毎日嘘をついて、心に棘を作っていたとしたらルイ自身のはずなのです。嘘をつき、人を騙し、傷つけてきたのはジェシーではありません。

「ジェシーは、嘘なんかついたことないぞ。薬だって...」

「薬なんて使っていないんだ」

ルイは耳を疑いました。

「だって、薬が効いてるって...！最近はず調子が良かったって」

「この病気を治す薬はまだできてないんだ、まだ発明されていない」

先生が拳を強く握るのが見えた。

「だって！あいつ言ったんだ...！元気になってきてるって。薬が身体に合ったんだっ」

「だからそれが嘘なんだよ！」

彼が言い終わる前に、先生が被せるように大声で怒鳴った。

「彼女は毎日会いにきてくれる君を心配させないために、毎日嘘をついていたんだ！心に棘ができて、何度も何度も、笑顔でその傷を隠しながら君に、元気な姿を見せるために」

ルイの目から、また大粒の涙が溢れ出しました。

嘘をついて、元気をもらっていたのは病弱なジェシーではなく、嘘つきのルイだったのです。

今まで嘘をつくことしかできなかったルイが、初めて人に嘘をつかれたのです。ですがそれは誰かを騙し、傷つける嘘ではありません。大切な人を守る、優しい嘘だったのです。

もぬけの殻になった病室に戻ったルイはベッドの横のテーブルに飾ってある花を少し撫でて、壁にある窓から外の様子を眺めました。窓から見えるわずかな外の風景、時折通る雲や鳥がジェシーにとってはたまらなくワクワクするものでした。

ふと、窓枠の縁に紙が数枚と鉛筆が2本置いてあるのを見つけました。

窓まで歩いて行ったルイはその紙を手に取りました。  
それは、ジェシーからルイにあてたまだ未完成の手紙でした。

「ルイ  
急にお手紙なんてごめんなさい。  
ルイには本当に長い間お世話になりました。

でも、もう会いに来るのは今日で最後にしてください」

ルイは手紙の内容に、息を飲みました。

「正直、毎日会いに来られるのは疲れるし、いつも聞かせてくれる話もつまらなくてあくびが出そうだわ。

私はずっと病気で病院の外に出たことがないのに、毎日毎日あなたの話を聞かされて羨ましかった。私の気持ちも知らずに、毎日毎日会いに来るあなたが眩しかった。

ルイに会うたびに辛い、もうこれ以上あなたには会えません。

だから会うのはこれで最後にしてください。

私はあなたのことなんか」

ここで手紙は終わっていました。

その時、後ろからさっきの先生の声が聞こえました。

「ナースコールが鳴って駆けつけた時、彼女はベッドに座ってそれを書いている途中だった」

ルイがまた溢れそうになる涙を拭きながら、先生の方を振り返った。

「ジェシーは本当に優しい子だよ、君ならわかるだろう」

そうです、  
ジェシーはルイに嘘をついただけでなく、自分自身にも嘘をついてしまったのです。

もう自分の命は長くないと悟ったジェシーは、自分がまだ元気なうちにルイに別れを告げることでこれ以上の病気の進行を止め、ルイに弱っていく姿を見せないようにしたのです。

しかし、ルイのことが好きという気持ちに嘘をつく行為は、ルイの前で元気を装うよりも大きく、悲しい嘘だったのです。

「彼女は強い子だった  
私たち医師にも弱い姿なんて1度も見せたことがなかった。その度に心には棘ができていったというのに。」

ルイ君  
君のことは、今日会う前からよく知っていたよ。そして君が嘘をつき続ける理由も」

先生がルイの横まで歩いてきて、窓の外を見ながら言いました。

「でも君の嘘は、強くない

いくら君の言葉の中で君の親が偉かろうが、君のお兄さんが喧嘩で強かろうが、だ」

ルイは黙って下を向くしかありませんでした。  
ジェシーの病気をしらなかったルイは、知らぬ間に大好きな親友を追い詰めていたのですから。

「先生」

深く息を吸ったあと、ルイが言いました。

「俺だって、ジェシーに会いに来るのはもう疲れてきてたんだ。いつまでたってもあいつ元気にならねーし、しまいにはこの俺に嘘をつくし。  
優しい嘘？ふんっ！  
そんなジェシーなんか

大嫌いだ！」

手に持っていた手紙をくしゃくしゃに丸めて投げ捨て、ルイは逃げるように病室を後にしました。

廊下を走るルイの心は、病気でもないのに、キュッと締め付けられる感じがしました。

完